



## 「広いセカイに飛び込んで」

法学部 4年  
武子あゆみ

「飛行機乗ったら、カレーの匂いがするらしいよ。」

大学二年の夏、私は初めていわゆる発展途上国・新興国と言われる国、インドへ降り立った。豊富で優秀な人材と広い国土を活かし、中国やアメリカなどの大国とも渡り合う、世界の経済大国の地盤を固めつつある国である。私がインドに来たのは、ゼミでの海外研修のためであり、私がそのゼミに入ったのは世界的情勢とりわけ開発課題について関心があったからだ。「もし世界が百人の村だったら」という映像をきっかけに、中学二年生の時から夢見ていた世界の現場。ようやくたどり着いたそこは、想像よりもずっとずっと、私を高揚させた。海の外の世界、また開発という世界、色んな“セカイ”へと旅を始めたのである。

二年後、私はアフリカのウガンダにいた。トビタテ留学JAPANという国費奨学生として、アフリカにおけるビジネスの現場を探るべく、日系企業でのインターンシップをしにきたのである。インドの翌年にはゼミでミャンマー、タイへ。プライベートで香港やベトナムなどにも赴いた。そこで共通して感じたのは「国全体の経済を豊かにしていけるのは、やはりビジネスである」ということであった。

ウガンダでのインターンシップは、実に刺激的であった。勤務先は、とある日系の塗料メーカー。日本企業といえども、現地ではイギリス人の社長、南アフリカ人の営業部長、白衣を着たインド人、ウガンダ人の製造スタッフなど、国籍や男女問わず様々な人のお仕事であった。互いの国の文化、音楽、スポーツの話をするだけでも1分1秒が楽しい。加えて彼らは、同じ目標に向かって議論を交わし合う同志なのだ。日々、そんな刺激を受けていてクタクタだったが、嬉しい悲鳴だったことは言うまでもない。

実を言えばウガンダに着いた当初は、異なることばかりで苦しかった。要は「スイミー」のような状態で、黒人の中にいるとただ歩いているだけでも目立ってしまうことに疲れていた。同僚の女性に「色白で羨ましいわ」と言われながらも、犯罪の標的になりやすいのも事実。食事も甘くないバナナや豆、パイナップルばかりで、朝は人口の3割ほどを占めるムスリムのコーランの音で目を覚ます日々であった。

しかし、自分が異国人であることを認識し、同僚たちとその違いを楽しむようになって分かったことがある。「みんな違ってみんないい」は、本当だったのだと。納豆を「臭い、まずい」と食べるウガンダ人の友人を見て、むしろ安心したものだ。

来春より、私はそのウガンダでインターンシップをした日系塗料メーカーの日本本社で働くことを決めた。かつての同僚やウガンダという国そのものに恩返しのできればという思いからだ。ゼミとウガンダ留学が、「異を知り楽しむこと」の大切さを教えてくれ、私を様々な世界へと誘ってくれた。インターンシップで着ていた、塗料まみれの服を見るたび、胸が高鳴る。この感覚こそ、一生の宝物である。

### ● 講評 ●

「みんな違ってみんないい」。作者が色んな「セカイ」へと旅した経験をもとに実感したこと。インド、ミャンマー、タイなどアジアの国々での海外研修やアフリカ・ウガンダでのインターンシップの刺激的な経験は、グローバルな多様な社会について、頭で考えるだけでなく、まさに五感を通して理解するきっかけとなったことが作品を通してわかります。この貴重な経験を、今後の人生に生かして前に進んでいっていただければと心から願います。



## 「『純ジャパ』という言葉からわかる日本における多様性の限界と克服」

法学部 3年  
小谷昌吾

最近の大学生の会話の中でよく耳にする言葉に「純ジャパ」というものが挙げられると思う。「純ジャパ」とは簡単に言えば長期海外滞在経験のない日本人を指す。帰国子女の対義語として頻繁に使われるこの言葉を、僕自身もよく使っていた。文末が過去形になる理由としては、自分自身がもはや世間で使われる「純ジャパ」の定義から外れたからだ。僕は去年留学していた。北米大陸東海岸を南に降りていく形でカナダ・アメリカ・メキシコを訪れ、色んな人に出会い、色んな文化を見た。勉強面で想像以上に苦戦するなど、100%完璧な留学生活ではなかったけれど、去年1年間は自分の人生で一番輝いていた瞬間だったと胸を張って言える。

帰国してからTOEICを受験したらほぼ満点近い点数を取れた。それを羨ましがる友達に自分は「ほら、俺もう純ジャパじゃないし」と言った。何か深い意図があった訳ではないが、自然とそういう風に受け答えをしていた。その時、偶然居合わせた外国人留学生の友達が純ジャパとはどういう意味かと英語で尋ねてきた。すると、隣にいた「純ジャパ」に該当する友達が「Pure Japanese!」と少し楽しそうに答えていた。直訳したら文字通りそうなるので、「まあ、いっか…」と思っていると、その留学生の顔色が変わり、少し怪訝そうな顔つきになっているのに気がついた。そして、英語で直訳すればPure Japaneseになるその言葉の裏に隠された気持ち悪さに気がついた。なぜ国内に留まると「純粋」になれて、海外に出ると「純粋」ではなくなるのか。純ジャパという言葉はまるで、日本の中と外で線引きし、その外側を「純粋でない何か」と見下すために生まれた言葉ではないかと思える。気持ち悪い、と素直に思ってしまう。

実際に「純ジャパ」という言葉を使う「私達」日本人は、その言葉がどれくらい不気味なのかそこまで意識的に考えていないのだろう。しかしそれは、無意識の中で、外に出ることによって日本人としての「純粋さ」が失われることに同意しているに他ならないのではないだろうか。日本という国は地理的に島国で、江戸時代には鎖国や藩民の移動を制限してきた。日本人にとって、生まれた土地ではないどこかへ移動することに良いイメージが持てないのは仕方がないことなのかもしれない。しかし、世界的に見れば、生まれた土地を出て新たな土地に巡り会うことは至極当然のことだ。何より日本人だって、日本という今の国土に居るのは私たちの祖先がそこに移動したからだ。

379年前と違い、グローバル化が進んだ多様性溢れる社会で活躍する事が求められる現在において、私たちの純ジャパという言葉が許す価値観は大きなハンデキャップだ。このハンデキャップをどのように克服していくのか、それこそが日本を多様性に溢れた社会にするために議論すべき課題なのだろう。上部だけを必死に取り繕うのではなく、私たちの価値観の限界に真正面から向き合うべきだ。

### ● 講評 ●

「グローバル化が進んだ多様性溢れる社会」において、我々はどうのような価値観に沿って生きていくのか。「純ジャパ」という言葉がもつ不気味さへの気づきを通して、筆者は思考を深めていきます。その率直な意見は頼もしく、また物事の本質を見抜こうとする姿勢に、大きな可能性を感じました。



## 「『多様性』の森がひらく自由な『空気』」

法学部 3年  
渡辺莉佳子

「KYだね」という烙印を押されてしまった私の中学生活は、「空気を読む」ことに躍起になってばかりだったと思ひ返す。すなおに思ったことを言うにも、「やっぱりKY」と言われるのが怖くて、押し黙ってしまう。いつしか私は「KY」から「静かな子」ということになっていた。とはいえ、私はほんとうに静かなのではない。家族にはうさがられているし、学校の会話のなかで黙って微笑んでいても、私の心はいつも不安でざわめいていた。「KY」だと言われることは、もしかすると、そんなことばを誰も使わなくなった今でも、私の声を絞め殺しているのかもしれない。とにかく、私はほんとうに「静かな子」になってしまった。小学校の頃は賑やかに口から吐き出されていた私のなかの「空気」は、「KY」ということばや、私自身の恐怖のなかに閉じ込められて、いつの間にかどこかへ消えていったのではないかと。そう考えると、とても悲しくなる。「KY」なんて流行らなければよかったのと思ういっぽうで、人間の心の狭さは廃ることなく跋扈しつづけているのだから、どうせ違うことばで殺されたのだろう。「変人だね」「キモい」「女のくせに」。今も、私やほかの誰かが殺されつづけている。

かくしてことばには窮屈さを感じる私だが、「多様性」ということばは好きだ。漢字の見た目もどこか愛らしい。いろんなかたちをした木がざわざわと広がっていくようなイメージがある。かつては緑の森を想像していたのだが、いつしかその色は、テレビで見たレインボーの旗の色になった。そして、その色はもっと漠然と、しかし多彩になってきている。本学OGの上川あやさんを先頭に、色とりどりの衣装で町を練り歩くひとびとの姿がさわやかにイメージを更新した。「多様性」の森は、あの人たちが自由にすむ道と重なっている。

しかし、言の葉を無闇に研いで、その棘をあの人たちに刺してやろうとする人たちがいる。「生産性がない」。じぶんが刺されていないとしても、息苦しくなる。「KY」が私を絞め殺したように、あの議員のことばが、自由な生をもとめる人々を絞め殺そうとしている。そうやって、暴力のことばが時代の「空気」となって、社会を覆いつつあるんじゃないか。「多様性」の森が酸素をうみだすはずなのに、いまの日本の「空気」は息苦しい。まだ森が足りていないんだ。誰もが自由に生きるためには、どうみても酸素が不足している。そう、息が詰まるようなこの「空気」は私たち全員の問題なんだ。たとえ直接刺された痛みがないのだとしても、私も息苦しく感じたのは当然なんだ。

自由に生きられず絞め殺される人たちのためにも、そして、社会の息苦しさを私たちが全員が解放されるためにも、木を植えていかなければならない。あいにく、この大学の空気はわりと綺麗だ。けどそれだっただけで完璧とは言えないし、大学の外はひどいものだ。森が全方位に広がるように、大学も、社会も、すべて変えていくんだ。閉ざされた窓を開け放とう。棘は切ってしまう。苦しむ人の叫びに耳を傾けよう。そうやって森はおおきくなっていくし、あの人たちはもっと自由に闊歩できるのだろう。

言っていなかったが、「自由」ということばは一番好きだ。このことばの「空気」はどこまでも透きとおっている。限りなく透明な「空気」は、もちろん、「読む」必要なんてない。そこからは無限につづく「多様性」の森がみえるだろう。

### ● 講評 ●

社会で起きている事実を俯瞰するだけでなく、「この『空気』は私たち全員の問題なんだ」と他者の痛みを寄り添う優しさ、「苦しむ人の叫びに耳を傾けよう」と主張する強さが感じられる作品です。また、作者もことばに窮屈さを感じたご経験があるからでしょうか、苦しむ人に向けられる理解と温かい眼差しが作品全体を通して伝わってきました。



## 「『空気』をつくる勇気」

社会学部 2年  
加藤一徳

我々の周りに漂う「空気」は実に捉えたいものだ。状況次第で重々しくなることもあれば、軽くなることもある。それはけっして実際の気圧によるものではなく、人間固有の感覚によって生じ、我々を支配することさえある。しかし、忘れてはいけないことがある。それは、「空気」を作っているのは他でもなく自分自身であり、我々は常に「空気」の担い手であるということだ。私がそうした自覚を強く感じたのは、大学でのある講義のことだ。

私はその授業が苦手だった。講義が面白くないということではない。受けている学生がまるでゾンビのように生気を失っていたからである。教室には教授の声以外の音が聞こえず、学生たちは下をうつむきじっとしている。教室は薄暗く、それでいて重々しい「空気」で支配されていた。

そういう「空気」に私は「吐き気」を覚えた。実際の嘔吐感ではなく、腹の中で循環している不快感が私を蹂躪していた。私は何とかこの「吐き気」を解消したかった。そこで、授業の最後に質問を受ける時間があって、私はすかさず手を挙げ、質問した。大教室の真ん中で手を挙げたのだ。今まで誰も質問する人はいなかったため、多くの眼差しが私に向けられた。眼差しによって全身が強張ったが、教授による回答が終わった瞬間、私の「吐き気」は治まった。

その後、驚くべきことがあった。それは、私の後にほかの人が質問をしたのである。彼が当時どんな質問をしたのかはもう覚えていない。ただその時、決定的に「空気」が変わった。息苦しく、締め付けられるような「空気」は透き通り、キレのあるものへと変わっていった。

次の授業からも、少しずつ質問が増えるようになり、学生の視線も教授へ向かうようになった。私は、今ここにいる学生が学問に関心がないから大人しくしていたというわけではなかったということに気付いた。本当は彼らももっと知りたかったのではないかと。とはいえ、大勢のいる中で発言するということができず、それらがあの「空気」を作り出してしまったのだ。

しかし、「空気」は変えられる。他でもない自分自身が。確かに、「空気」を変えるために行動することは難しいだろう。「ここで発言したらみんなに変だと思われるかもしれない」、「自分の意見は的外れで、笑われてしまうのではないかと」など考えることは間違いではないかもしれない。だが、行動しなければ全身を覆う重苦しい「空気」から逃れることはできない。行動すれば、「空気」が少しずつ変わる。そして一人一人のそうした行動が、新しい「空気」をつくっていくのである。私たち一人一人が「空気」の担い手であることを意識し、少しでも変えていこうと努力しようとする勇気が今必要なんだと、私はこの大学で気付かされたのである。

### ● 講評 ●

知らない人がたくさんいる教室で質問するのはとても緊張しますよね。ですが、まさに作者が言うように、勇気を出して手を挙げてくれたら、きっと後に続く人が出てくるはずです。また、受講生の質問を引き出して一緒に「空気」を変えていけるよう、教員もさらに努力しなくてはと思いました。